「わたしを憐れんでください」（ルカによる福音書一八章三五～四三節）

1　エリコに近づいて

「エリコの近くで盲人をいやす」――今日の箇所の見出しです。いまお読みしてお分かりのように、内容はまさにこの見出しの通りであって、それ以上でも、それ以下でもありません。

イエスによる癒やしの出来事がこの箇所の中心です。癒やしというと、私ども、ガリラヤでの宣教を思い起こします。神の国が説かれ、福音が語られ、癒やしがなされていました。

しかしそのガリラヤを去ってから、癒やしが、あまり出てこなくなったことも、私ども知っています。もちろん、なかったわけではありません。水腫の人をお癒やしになった記事が一四章にありましたし、一七章には重い皮膚病の十人が癒やされたことも伝えられていました。

そして今日の箇所、盲人の癒やしです。盲人の目が見えるようになったという出来事です。この癒やしは、エルサレムへの旅の途中でなされた、あまり多くない癒やしの一つです。それだけではなく、じつはルカによる福音書が伝えている最後の癒やしの記事でもあるのです（ただし二二・五一も参照）。

いま癒やしの記事としては最後だと申しました。じっさいイエスはエルサレムを間近にしています。旅は終わろうとしています。

癒やしがなされた場所は〈エリコの近く〉です。エリコはヨルダン川のそばの古くからの重要な町です。イエスはヨルダン川の東側からエリコの町に入ろうとしているのでしょう。エルサレムまではあと二〇キロ少しです。このエリコでのことを、ルカは、今日の盲人の癒やしと、町に入ってからの徴税人ザアカイとの出会いのこと、この二つのことを伝えています。

この盲人の癒やし、今日の聖書箇所を前にして私が最初に感じたのは、どうして癒やしのことが、この期に及んで、つまり、ガリラヤではなく、いまエルサレムにまさに着こうというところで出てくるのだろう、少し申し上げたように、ガリラヤ伝道にこそふさわしく思われるのに、なぜこれが、こんなところで出てくるのだろうかということでした。

しかし何回も読んでいるうちに、この前後も併せて読んでいるうちに、これはここでなければならない、新聞でいうと一面でも二面でも、まして三面でもない、小さなコラムのような箇所ですが、ここにあってこそじつに意味深いことが、自分なりに分かってきたように思います。

それは、簡単にいえば、イエスがここまでのエルサレムへの旅の中で求めてきたことが、今日の箇所で、つまり癒やされた盲人においてようやく満たされつつある、それを示す出来事であったのだということです。

それならこの、イエスがエルサレムへの旅の中で求めてきたこととは、いったい何であったのかといえば、それは二つあります。一つは、イエスとはだれかということ

が、すなわち、神から遣わされたメシア（＝キリスト）であるということが、人々にはっきり知られることでした。

もう一つは、そのイエスに従う者たち、すなわち、使徒たち（弟子たち）の、確かな信仰の形成です。

この二つのことが癒やされた盲人において現実のものになっていることをイエスは見てとったのです。というのも、この盲人はイエスを「ダビデの子イエスよ」と呼びかけ、メシアと告白していますし、また彼が神を賛美しながら従って行く姿にはイエスの求める弟子の姿があったからです。

なるほど、今日の箇所、一つのエピソード（挿話）のような、読み飛ばしがちな箇所です。しかしイエスが、そのようにしてこの盲人に心からの満足をおぼえて、エリコの町中へ入って行ったことは忘れてはなりません。

2　イエスよ、ダビデの子よ

さて一人の盲人の物乞いが、最初に登場します。

> イエスがエリコに近づかれたとき、ある盲人が道端に座って物乞いをしていた。群衆が通って行くのを耳にして、「これは、いったい何事ですか」と尋ねた。「ナザレのイエスのお通りだ」と知らせると、彼は、「ダビデの子イエスよ、わたしを憐れんでください」と叫んだ。先に行く人々が叱りつけて黙らせようとしたが、ますます、「ダビデの子よ、わたしを憐れんでください」と叫び続けた。イエスは立ち止まって、盲人をそばに連れてくるように命じられた（三五～四〇節）。

これは一つのエピソード（挿話）のようだと申しました。というのも、偶然に、予期しない形ですべては進行しているように見えるからです。たまたまそこに盲人の物乞いがいた、たまたまそこにイエス・キリストが通りかかったということです。じっさい旅の途中であることが、言葉に表れています。例えばイエスは「エリコ［の町］に近づいて」行かれます。盲人は「道端に」座っています。彼の耳に群衆が通って行く足音がします。何事かと思って周りに聞くと、「ナザレのイエスのお通りだ」と知らされたというのです。

ですから、時間が、そのまま過ぎて行くことも、当然にありえたことです。そうなると、イエスと盲人の出会いは起こらず、彼が救われることも、弟子としてついていくこともなかったのです。

しかし出会いは起こったのです。それは盲人の「叫び」から始まりました。「ダビデの子イエスよ、わたしを憐れんでください」。

しかしその叫びを「先に行く人々が叱りつけて黙らせようとした」とあります。「先に行く人々」とはだれか、謎のような言葉です。私はこれは――いろんな理解がなされている中で――弟子たちのことと考えざるをえないと思います。というのも、思い起こしていただきたいのは、イエスに祝福してもらおうとして子供を連れて来た人たちを弟子たちが叱った実績があるからです。それだけでなく、今日の箇所の直前、十

字架の死と復活についてのイエスの言葉を、彼ら弟子たちは、何も理解できなかったともあるからです（三四節）。

しかし盲人の物乞いは、黙らされようとしても、叫ぶことを止めませんでした。ちょうど、イエスの譬えにあった、裁判を開いて自分の権利を守ってほしいと叫びつづけた「やもめ」（一～八節）のようにです。「昼も夜も叫び求めている選ばれた人たち」を「ほうっておかれること」はないとイエスが言われたことも私ども知っています（七節）。ここでもイエスは、憐れみを求めて、叫び続けた、物乞いの盲人をほうってはおくことはなさいませんでした。

イエスの耳には、「ダビデの子イエスよ」という呼びかけの言葉が、ひときわ強く響いたのではないでしょうか。

彼の後先（あとさき）を、「群衆」がついて行きます。彼らもみな何らかの意味でイエスに期待をかけていた人たちです。しかしだれもイエスを「ダビデの子」と口に出して言う人はいませんでした。思っていても言わなかったのか、そう思わなかったから、何も言わず、付和雷同し、ただついて行っただけなのか、はっきりしたことは分かりません。

しかしこの盲人だけは、この言葉を口にしたのです。一度だけではない、何度も口にしたのです。イエスはそれに耳を傾け、聞いてくださいました。「ダビデの子イエス」、言葉通り訳せば「イエスよ、ダビデの子よ」です。イエスはこの告白の言葉を喜んで受け入れてくださったのです。

ご承知のように〈ダビデの子〉とは、イスラエルでは、来るべき救い主メシアを意味していました。メシアはダビデの子孫のうちに約束され、この方が、世を治め、公平と正義を行い、イスラエルに救いをもたらすのです。このメシアと共に神の国は到来するのです（サムエル下七・一二、ルカ一・三二他）。

じつはルカによる福音書で、イエスをダビデの子とはっきり告白する例は、ここがはじめてです。多くの群衆が、また弟子たちが、イエスについて行きます。しかしその中で、この盲人の物乞いだけが、イエスをメシアと告白します。イエスはこれを受け入れます。

3　イエスに従う

ダビデの子よ、という盲人の言い表しをイエスは肯定し、メシアであることを認めつつ、目が見えるようになった盲人に相対します。

> 彼が近づくとイエスはお尋ねになった。「何をしてほしいのか」。盲人は、「主よ目が見えるようになりたいのです」と言った。そこで、イエスは言われた。「見えるようになれ。あなたの信仰があなたを救った」。盲人はたちまち見えるようになり、神をほめたたえながら、イエスに従った。これを見た民衆は、こぞって神を賛美した（四〇～四三節）。

イエスと癒やされた盲人とのこのやりとりの中で、まず注目すべきことは、癒やさ

れた盲人がイエスを「主」と呼んでいることです。メシアであるイエスは、いまや彼にとって、彼の主なのです。

イエスはただたんに、客観的に、すべての人間にとっての救い主（メシア）であるだけではありません。この癒やされた盲人の主、私どもの主です。主とは、支配者であり、私どもはこの方に属する者です。神を信じるということは、ただ超越的な、万能の神がいると信じるだけではありません。この方が私と関わり、私を支える主として信じ、従うことです。

いまやこの主が彼に視力を与えてくださいました。彼は見えるようになります。私どもはイエスが、その宣教活動の始まりに、イザヤ書を用いて語った言葉を思い起こさなければなりません。「主がわたしを遣わされたのは、囚われている人に解放を、目の見えない人に視力の回復を告げ、圧迫されている人を自由にし、主の恵みの年を告げるためである」（四・一八）。

このイザヤの言葉は、今日の箇所で、すなわち、ガリラヤ、エルサレムへの宣教の旅の最後に、盲人の癒やしにおいて成就し、現実となったのです。

しかしこの盲人の物乞いは、癒やされただけでは満足しませんでした。さらにイエスに従って行ったのです。

それはイエスが許したからです。許したというのは、癒やされた人で、従ってくることを認められなかったケースもあったことを思い出すからです。ガリラヤの伝道のときのこと、悪霊を追い出してもらった人が、イエスについていきたいと願ったことがありました。しかしイエスはこれを許さず、自分の家に帰ってそこで証しするように命じたのです（八・三八～）。ですから、今日の箇所では、従うことを、弟子として従うことを許したのです。そしてそのかぎり、これはこの福音書の最後の召命の出来事でもあります。

こうして弟子が一人加わります。このことは、ペトロなど、すでに使徒（弟子）として従っていた者らに小さくない影響を与えたものと推測されます。というのも、今日の箇所もそうですが、このところ、使徒たちの間に、疑問に思うようなことが、いくつか起こっていたからです。

少し前の箇所で、弟子たちが祝福を受けるために子供を連れて来た人々を叱ってイエスに近づかないようにしたことも、今日の箇所で、盲人のメシア告白を黙らせようとしたことも、そうです。

今日の箇所の直前には、彼ら使徒たちが、ここに至ってもまだ、イエスの十字架と復活の意味を理解していなかったという、ずいぶんきびしい言葉も、書いてありました（三四節）。

こうした中で、新しく加わった癒やされた盲人の物乞い、彼はきっとよい証しをしたと思います。神の国の福音は、やもめ（一～八節）を、徴税人（九節～）を、子供たち（一五節～）を、貧しい人々（三五節～）を目指しているのです。その中にあって、癒やされた盲人の物乞いも、そのようなイエスの福音の、いわば生き証人として歩んだと思うからです。エルサレムに向かう中で、イエスは、弟子たちの信仰を確かなものにしようと心砕かれたことは、間違いありません。このイエスの祈りの中を私どもも歩んでいくことが許されるのです。

（二〇二二・七・一〇）